

重紐をめぐる幾つかの問題(2)
一甲乙類、AB類という命名について—

吉池孝一・中村雅之

1. はじめに

中村：今回は重紐の「紐」とは何かということの問題にしました。

吉池：中国の学界では紐を小韻と声母の意味で使用し、重紐の紐については、声母か小韻か、あいまいに見えました。研究者によって理解が異なるのかもしれませんが。それに対して、日本の学界では紐を声母とするのがふつうであり、重紐の紐も声母と理解されているようです。

中村：そこで、重紐の紐を小韻と定め、「重複した小韻」（重複したように見える小韻）を「重紐」と呼ぶことを、学界に（とくに日本の学界に）提案しましたね。いずれにしても、日本の学界には紐自体に小韻の意味があることについての考慮はなさそうだとしました。

吉池：ほぼそれで良いのだと思いますが、紐＝小韻とする文献を見落としていたので、ここに補足します。

中村：どの文献でしょう。

吉池：三根谷徹(1953)「韻鏡の三・四等について」です。『中古漢語と越南漢字音』所収によりますと次の通りです。「以上述べたところにより、韻鏡が「切韻の一の解釈」であり、而もそれが切韻の音韻体系を忠実に表わしていないのは「韻表の体裁を揃えようとした余り」「重大な矛盾と混乱を起こすことになった」と考えるよりは、切韻系韻書の韻及び小韻（紐、韻図の帰字に相当）をそのまま保とうとしながら編纂当時の音韻体系に強くひかれて解釈したためとする方が妥当であろうことを略々明かにし得たと思う。」(58頁)

これは紐自体の意味を指したもので、重紐と言ったときの紐とは何か、ということではありません。しかし日本の文献で、このように紐＝小韻と明示したものは少ないように思うので書き加えておきます。

中村：なるほど、日本の文献中の紐＝小韻の例を見落としていたから補充するということですね。以上は用語にかかわる前回の議論です。今回も用語にかかわる議論をします。重紐甲

類・重紐乙類、重紐A類・重紐B類などとするところの、甲・乙、A・Bという命名について検討しましょう。

吉池：重紐とされる各 pair のうち、韻図の 3 等に置かれるものを B 類、4 等に置かれるものを A 類と命名し、現在でもこの言い方が使用されているわけですが、等位の順番をそのまま利用して、3 等を A 類、4 等を B 類としてもよかったですし、その方が自然に見える。ところが、そのようにはしなかった。

中村：命名した時の何らかの事情が反映しているのでしょうか。その辺の事情について確認しましょう。

2. 初期の重紐文献

吉池：頼惟勤(1982)「中國音韻史上の問題点」¹によると初期の重紐に関わる文献は次のとおりです。なお、*はいま追加したもので頼惟勤(1982)にはありません。重紐とされる各 pair のうち、韻図の 3 等に置かれるものと 4 等に置かれるものをどのように呼んでいるか、その点について表にしてみました(表 1)。

表 1. 初期の重紐文献 (01~26)

No	文献名	重紐現象の区別の呼称
01.	有坂秀世(1935) 萬葉假名雜考 (『国語研究』第3巻第7号。『国語音韻史の研究増補新版』三省堂所収、1980年第7刷、557-561頁による。)	3等(中舌性拗音)と4等(前舌性拗音)
	①「漢字音の直拗に關する卑見を結論だけ述べておきたいと思ふ。…省略…。但し、拗音の中には、前舌性拗音と中舌性拗音との二種があつた。即ち、唇音四等・舌音三四等・牙音四等・齒音三四等・喉音四等・半舌音三四等・半齒音三等は前舌性拗音であり、唇音三等・牙音三等・齒音二等・喉音三等は中舌性拗音である。」(561頁)	
02.	有坂秀世(1936) 漢字の朝鮮音について(下) (『方言』第6巻第5號。『国語音韻史の研究増補新版』三省堂所収「漢字の朝鮮音について」(上、下を合わせたもの)、1980年第7刷、303-326頁による。)	3等(中舌性拗音 i)と4等(前舌性拗音 i)
	①「抑、中古以前の支那語では、方言によつて多少の差異は有つたらうが、拗音的要素に少なくとも二種あつた。即ち、唇牙喉音三等・齒音二等は中舌的拗音(i)であり、唇牙喉音四等・舌音齒音半舌音三四等・半齒音三等は前舌的拗音(i)であつた。」(320頁)	

¹ 『お茶の水女子大學附属高等學校研究紀要』第27号、1982年。『頼惟勤著作集 I 中國音韻論集』汲古書院所収、1989年、30-46頁による。

03. 有坂秀世(1937-1939) カーグレン氏の拗音説を評す(一)~(四) 3等 \ddot{i} と 4等 i

(『音聲學協會會報』1937年第49, 1938年51, 53, 1939年58号。『国語音韻史の研究増補新版』三省堂所収「カーグレン氏の拗音説を評す」、1980年第7刷、327-357頁による。)

①「以上述べて来た所を綜合して考へるに、古代支那語に於ける α 型韻の唇牙喉音に於ては、四等の拗音的要素 i に對し、三等の拗音的要素は \ddot{i} であつたらうと想像されるのである。」(348頁)

前舌的拗音、中舌的拗音という表現は避け、直接に \ddot{i} と i で表記する。これ以後の07. 有坂秀世(1940)も同様である。

04. 陸志韋(1939) 證廣韻五十一聲類 第一類(開3等)第二類(開4等)
第三類(合3等)第四類(合4等)

(『燕京學報』第25期、1939年、1-58頁+表2)

「附録(一) 陳澧廣韻類考校補」は全声母の下、韻母を四類に分けて議論をする。そのうち重紐現象がある支紙眞韻の唇牙喉音声母の下における韻母の類別の記述がある紙眞韻を見ると次のとおり。

①「紙韻‘綺墟彼切’，‘彼’在第三類，‘綺’在第一類。‘綺’以‘彼’爲切下字，陳氏以廣韻之疏。按切三，王二均作‘墟彼反’，且同爲錯類之例。唇音開合，唐人時與宋人不同，此一例也。」(32頁)

②「眞開合四類，似無可訛，然界限實難劃清。‘避{田+比}義切’，‘義’在第二類，‘避’在第四類。‘避’以‘義’爲切下字，陳氏以爲廣韻之疏。‘避’爲唇音，唐人難辨開合。兩類雜亂，王二，王三亦然。」(32頁)

「‘綺’在第一類」の綺を、『切韻考』の表は溪母開口三等とし表の第一段目に配置する。「‘義’在第二類」の義(議)を、『切韻考』の表は疑母開口四等とし表の第二段目に配置しする。「‘彼’在第三類」の彼を、『切韻考』の表は非母合口三等とし表の第三段目に配置しする。「‘避’在第四類」の避を、『切韻考』の表は奉母合口四等とし表の第四段目に配置する。なお『切韻考』の表は「切韻考外篇三卷」卷二の六葉ウラから八葉裏のもの。第一類(開3等)第二類(開4等) 第三類(合3等)第四類(合4等)の類別は陳澧『切韻考』を参考にしたものであろうが、陸志韋(1939)がそのまま引用するからには陸氏の考えと一致していたと見ていいであろう。なお、3等4等という等位の順に従って、第一類、第二類としている。

05. 河野六郎(1939) 朝鮮漢字音の一特質 乙(開3等)甲(開4等)
丁(合3等)丙(合4等)

(『言語研究』3、1939年。『河野六郎著作集2 中国音韻学論文集』平凡社所収、1979年、155-180頁による。)

下記の括弧 [] 中のローマ字は朝鮮漢字音。

①「先ず第一に中國音韻學の基礎たる切韻と比較してみよう。

五支 (見) 甲¹⁾ 乙 羈居宜[kii] 丙 規居隨[kiu] 丁 嬌居爲[kiu]

(溪)		斂去奇[kʰi]	關去隨[kiu]	虧去爲[kiu]
(群)	祇巨支[ki]	奇渠羈[kʰi]		
(疑)		宜魚羈[ʔi]		危魚爲[ui]

・・・以下省略・・・」(156頁)

②「1) 甲・乙・丙・丁の四類は陳澧の分析に従つて假に附したもので、陳澧は其の名著切韻考に於いて廣韻の反切を韻字により四類に分析した。」(157頁。①の甲¹⁾の注)

③「甲 -i- 乙 -i- 丙 -i^w- 丁 -i^w- の如き音價を推定することが出来る。」(174頁)

④「曩に橋本先生は日本上代の古文献に於ける假名の相異に就いて、國語學上に大きな寄與を爲されたが^{②)}、其の結果の中、キの二類を見ると、上の三者との一致は驚く可きものがある。即ち、【3,4の数字は今対談者が重紐韻に対して『韻鏡』²⁾『廣韻』³⁾の情報に依り付した等位】

キ(甲) 支伎3,4 岐4 妓3 企4 祇4 耆3 祁3 棄4 弃4 (全部[ki])

ギ(甲) 岐4 伎3,4 祇4 嗜(以上[ki]) 儀3 蟻3 (以上[ʔi])

キ(乙) 奇3 倚3 騎3 寄3 其紀己記忌(以上[kʰi]) 癸4 ([kiu])

ギ(乙) 義3 宜3 (以上[ʔi])」(169-170頁)

(2)橋本先生：「上代の文献に存する特殊の假名遣と當時の語法」(『國語と國文學』第八卷・第九號、昭和六年九月)」(169頁)

『切韻考』「外篇の表」・陸志韋(1939)は3等・4等の順に従い第一類・第二類とするが、河野六郎(1939)は3等・4等に乙・甲を当てる。乙・甲の当て方が順番のとおりでないのはなぜか。河野六郎(1939)は「假に附したもの」とするが、④によると、上代日本語の甲類にはほぼ重紐4等が当り、乙類にはほぼ重紐3等が当る。上代日本語の甲・乙類と等位との対応を考慮し、3等を甲、4等を乙ではなく、3等を乙、4等を甲としたと見る事ができる。

06. 陸志韋(1939) 三四等與所謂‘喻化’ 3等と4等

(『燕京學報』第26期、1939年、143-173頁)

①「法言之世，三四等合韻中之重出小韻，在若種方言中必不同音讀。」(136頁)

07. 有坂秀世(1940) 先秦音の研究と拗音的要素の問題 3等_iと4等_i

(『音聲學協會會報』1940年第60,61号。『國語音韻史の研究増補新版』三省堂所収、1980年第7刷、365-368頁による。)

①「さて、試みに、大矢博士の周代古音考韻徴に就き、所謂成部の文字の中で、切韻時代に拗音であつたと考へられるものを抜き出して見ると、その中、まず_i系に屬するものは名・屏・聘・騁(以上唇音四等)畏・

²⁾ 李新魁(1982)『韻鏡校証』中華書局による。

³⁾ 『校正宋本廣韻附索引』藝文印書館六版1986年による。

傾・輕・瓊（以上牙音四等）榮・營・盈・楹・羸・纓（以上喉音四等）成・城・誠・盛・正・政・征・聲（以上齒音三等）清・情・靖・倩・精・請・菁・姓・性・旌・井・省・駢（以上齒音四等）貞・禎・楨・程・醒（以上舌音三等）であつて、これらは皆後世は清（靜勁）韻に入つてゐる。之に對して、*i*系に屬するものは鳴・平・苹（以上唇音三等）敬・驚（以上牙音三等）榮・瑩（以上喉音三等）生・甥・笙・牲・眚（以上齒音二等）であつて、これらは皆後世は庚（梗敬）韻に入つてゐる。」（366頁）

②「古代支那語の拗音的要素に存在した *i* と *ï* との區別は、先秦時代の古音を研究するためにも、重大な意義を持つものである。それは、頭音の問題にも韻の問題にも關係する。」（368頁）

08. 趙元任(1941) Distinction within Ancient Chinese 3等と4等

(*Harvard Journal of Asiatic Studies* Vol. 5-3/4, pp. 203-233. 雑誌の年度は1940年、刊行は1941年)

① “In the rime 支 KARLGREN recognizes only two finals, one *k'ai k'ou* and one *ho k'ou*. But if we examine the *fan ch'ieh* in the rime, there are three forms for initial *k*, three for *k'*, three for *g*, four for *x*, three for *·*, and three for *ts*. For example,

犧許羈 <i>xiě</i>	[靡+下に手]許爲 <i>xjwiě</i>
訖香支 <i>xiě</i>	陸許規 <i>xjwiě</i>

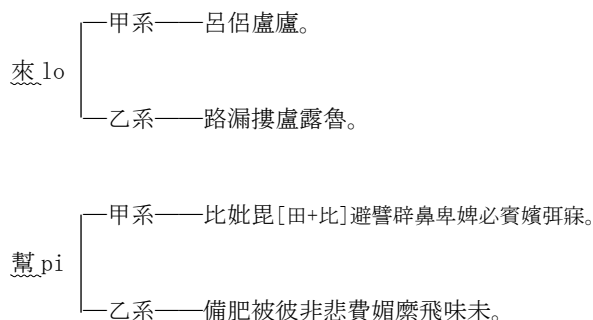
KARLGREN does not differentiate the first row from the second. CH'EN LI [陳澧: 對談者] recognizes these distinctions in his *Ch'ieh yün k'ao* [切韻考: 對談者] as well as in *Ch'ieh yün k'ao wai p'ien* [切韻考外篇: 對談者] and follows the practice of the Sung rime tables in calling them division III and division IV. As these have nothing to do with yod (許許許香 being all synonymously *xj* even from KARLGREN's point of view), the meaning of III and IV must lie somewhere else, and we shall leave it to future investigation.” (pp. 220-221)

09. 王靜如(1941) 論開合口 3等と4等

(万葉仮名の乙系(3等)と甲系(4等)を利用)

(『燕京學報』第29期、1941年、143-192頁)

①「三書【古事記、武烈記、萬葉集: 對談者】撰者均出於奈良之世、約當唐貞元(西紀790)以前。今以來幫兩屬爲例。



以上兩屬各分甲乙二系。凡甲系之字所注語音不與乙系相通。易言之、即其土語一經甲系字注音、即永不用乙系之字、或‘呂’或‘侶’或‘盧’或‘廬’、絕不用及‘路漏樓’等字。反之、乙系亦絕不與甲系相通。

故東海之人，有以來甲爲 lō，來乙爲 lo，幫甲爲 pi，幫乙爲 pī 者。此固所以比附阿爾泰語系母音調諧 (vocal harmony) 之特性³²，吾人不必論其是非。然甲乙兩系必不相同，且其所擬音值亦大體無誤，則可斷言。來甲系正當吾國韻圖之三等。三等古音有介音 -i-，久成定論。其乙系屬於一等，無介音 -i-，亦人所盡知。則其漢音大致爲 liō 及 lo 之分別。至於幫屬之甲乙兩系，韻圖均歸三等韻，然吾人若推之上述合韻第一類唇音合三開四之說，則其分別立見，……

32. 參橋本進士氏上代ノ文獻ニ存スル特種之假名遣ト當時ノ語法，國語ト國文學，1931 九月。(161 頁)
②漢語の汕頭・福州方言における重紐 34 等字の音を挙げ「凡此例字均四等介音 i 爲前，三等介音 i 較後之確證。」(175 頁)、「余分腭介音爲前後。此所謂‘前’者，乃係極‘細’ (close) 且‘前’ (front) 之音，音標可爲 i。而所謂‘後’者，乃較‘後’ (back) 且略‘弘’ (open)，其音可爲 ɪ，或中元音 (central) 之 i 或 ī，…【略】…。」(177 頁)、「三等韻中腭介音有前後之異。其四等字の介音較前，爲極細之 -i-，而三等爲較後略弘之 ɪ (音彩或如 ɪ, i, ɯ 等)。」(191 頁)

①の「來 lo」の「甲系」と「乙系」例示は逆。したがって上代日本語の「來 lo」に関わる議論は誤りであり、甲系 lo、乙系 lō とすべき。「幫 pi」の「甲系」の例字は重紐 4 等字で、「乙系」の例字の大半が重紐 3 等字であるから、等位により重紐を呼び分けている。上代日本語の甲系・乙系という呼称は参考程度とみることができる。なお、カールグレンの三四等韻の三種の分類 α・β・γ をそれぞれ甲類・乙類・丙類とし (170 頁参照)、上代日本語の甲系・乙系と呼称を区別する。

②は興味深い。所謂重紐 3 等の介音を前・細、4 等の介音を後・弘とする。“前後”という表現の順番によって、4 等を先に配し、3 等を後に配するように見える。これは学問とは関りのないことであるが、このような配置は文章として自然なものであろう。

10. Nagel, Paul (1942) Beiträge zur Rekonstruktion der 切韻 Ts'ieh-yün Sprache auf Grund von 陳澧 Ch'en Li's 切韻考 Ts'ieh-yün-K'au 3 等 (x) と 4 等 (y)

(通報 T'OUNG PAO, VOL. 36, pp. 95-158)

① “zwei Arten von Finalen, von denen die einen in den Reimtabellen der Sung-Zeit in Stufe III stehen, die anderen abweichend von der Regel in Stufe IV, trotzdem sie jodizierte Anlaute haben; diese Scheidung kommt nur nach gutturalen (einschl. laryngalen) und labialen Anlauten vor. Zur einstweiligen Unterscheidung kennzeichne ich die in Stufe III stehenden Silben und Finalen provisorisch mit Index x, die in Stufe IV stehenden mit Index y, z. B. *kj'ën_x-j'ën_x*, *kj'ën_y-j'ën_y*. Wenn man diese Unterscheidung nicht beachtet, dann werden 70 Silbenpaare des *Kuang-yün* homophon;” (p. 116)

重紐 3 等と 4 等の同一推定音に、それぞれ x と y を付して、音節の何らかの区別を表記する。アルファベットの順に 3 等 (x) と 4 等 (y) とするところは、後出の文献 13. 周法高 (1945) の 3 等 (B 類) と 4 等 (A 類) と異なる。

11. 董同龢(1944) 上古音韻表稿

3等と4等

(中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之二十一、1944年12月四川李莊石印出版(百冊のみ)。1944年初版本は未見。『歷史語言研究所集刊』第十八本、1948年商務印書館重版による。)

①「用以上所訂的標準把“脂”與“微”分部是有什麼意義呢？第一，非但是由詩韻與諧聲我們可以看得出脂部字跟微部字本來是分居劃然的，即在廣韻，他們還是留下了許多區分不混的痕跡。請看脂韻的“重紐”：

平	上	去
丕：紕	鄙：匕	痺：秘
邳：[田+比]	否：牝	凵：屁
逵：葵	軌：癸	鼻：備
		寐：郢
		器：棄
		媿：季
		匱：悻

這些不同音切的字向來是沒有法子解釋的。但是如從上古來源方面去推求，問題就大致清楚了。」(70頁)

『韻鏡』によると、上記は脂韻の例字で、左は3等、右は4等。ただし去声の、痺と秘、鼻と備、寐と郢は4等と3等で逆になっている。

12. 董同龢(1945) 廣韻重紐試釋

3等と4等

(『六同別錄』上冊(臺北：中央研究院歷史語言研究所、1945年。『六同別錄』は未見。『中央研究院歷史語言研究所集刊』第13本、1-20頁、1948年による。)

①「“重紐”在廣韻中是些很值得注意的現象。他們的絕大多數都是在幾個三等韻【34等合韻を指す：対談者】裏。並且，除去幾個特殊的例子，又完全結集於唇牙喉音。對於他們，一向還沒有人能說出所以然來。」(1頁)

②「看到韻圖，支脂真(諄)仙祭宵諸韻的分類情形就清楚得多了。在時代較早的通志七音略與韻鏡裏，這幾韻的唇牙喉音都是受着兩種不同的處置：一類排在三等，一類排在四等。‘重紐’字在韻書中無法分的，也都各得歸宿，分居不紊。」(5頁)

13. 周法高(1945) 廣韻重紐的研究

3等(B類)と4等(A類)

(『六同別錄』上冊(臺北：中央研究院歷史語言研究所、1945年。『六同別錄』は未見。『中央研究院歷史語言研究所集刊』第13本、49-117頁、1948年による。)

①「現在我把重紐都抄下來。唇音的切語下字，不管開合，我一律把唇音抄在開口下面，理由見第四節。重紐大多是唇牙喉音，在韻鏡，七音略裏分列在三四等，就是本文所分的A B類。現在大致把列在四等的A類排在前，列在三等的B類排在後。譬如“訖，香支切，二”，“穢，許羈切，十七”；“訖”字列於四等，屬A類，“穢”字列於三等，屬B類，注的數字代表本切語所收的字數。

	【四等A類】	【三等B類】
支開 曉	訖(香支, 二)	犧(許羈, 十八)
羣	祇(巨支, 二五)	奇(渠羈, 十)
邦	卑(府移, 十一)	陂(彼爲, 十一)
滂	[比+皮](匹支, 一)	鉞(敷羈, 十二) ([比+皮]近韻末, 切韻無, 出後増)
並	陣(符支, 十五)	皮(符羈, 六)
明	彌(武移, 十七)	糜(靡爲, 九)
合 曉	陸(許規, 九)	摩(許爲, 六)
見	眞(居隋, 七)	嬌(居爲, 二)

・・・【以下略】・・・

」 (51 頁)

②「陳澧切韻考【本篇卷四第九葉裏の表：対談者】對於重紐的處置是這樣的：如支韻“訖(香支), 犧(許羈), 摩(許爲), 陸(許規)”, 分列四格。第一, 第二格爲開口, 依切語下字分列兩格。第一格屬A類, 第二格屬B類。」 (65 頁)

③論文の末尾に「本文承羅田, 李方桂, 丁梧梓三先生有所指正, 謹致謝忱。

民國三十年初稿於昆明, 三十三年重訂付印於李莊。」 (117 頁) とある。

①によると、3等(B類)・4等(A類)であり、重紐韻にA類B類という用語を用いる。なぜ3等をB類とし、4等をA類とするのかについての説明はない。

②によると、陳澧『切韻考』の本篇卷四の表は、第一格【第一段目】に開口の4等字を配し、第二格【第二段目】に開口の3等字を配す。『切韻考』の表には二種あり注意が必要である。本篇卷四の表(韻字と反切による)と、外篇卷二の表(韻字と反切と韻図の情報[開合、等呼]による)である。両者は字の配置を異にする。「本篇の表」は原則として第一格に開口4等字、第二格に開口3等字、第三格に合口3等字、第四格に合口4等字を配す。「外篇の表」は原則として第一格に開口3等字、第二格に開口4等字、第三格に合口3等字、第四格に合口4等字を配す。04. 陸志章(1939)は「外篇の表」に依るが、周法高(1945)は「本篇の表」に依る。周氏は「本篇の表」の文字配置の順番により、4等字を第一とし3等字を第二とする。そして4等3等の順にA類B類を配し、4等(A類)と3等(B類)とする。

③によると、初稿は1941年である。万葉仮名の乙系(3等)と甲系(4等)とする。09. 王静如(1941)「論開合口」と同年。なお重訂付印は1944年とある。『六同別録』は1945年(中央研究院歴史語言研究所ホームページによる)であるから年次が合わない。周氏が言う「重訂付印於李莊」が『六同別録』を指すものかどうか不明。

14. 陸志章(1947) 古音説畧

3等と4等

(燕京学報専号第20期、1947年。『陸志章語言學著作集(一)』中華書局、1985年による。「卷首《切韻》的音値」(1-60頁)の各所に重紐現象の記述がある。注において「付印以後、才讀到《六同別録》(中央研究院史語所油印)所載的董同龢《廣韻重紐試釋》、周法高《廣韻重紐的研究》(1944)。跟王說部分相同。」(19頁)とあるが、自らの文章の中で重紐という用語は使用しない。)

①「在支脂等三四等韻裏面，同一聲母之下，同是開口或是合口，同一類切上字，可是這樣的字在等韻有時作三等，有時作四等。」（5頁）

②「實際上《廣韻》跟《韻鏡》很少在同一聲母之下並列四個小韻的例子，像支韻“犧，許羈切”開三；“訖，香支切”開四；“摩，許爲切”合三；“陸，許規切”合四。」（25頁）

15. 周法高(1948) 古音中的三等韻兼論古音的寫法 3等(B類)と4等(A類)

(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第19本、203-233頁、1948年。) (純3等韻C類)

①「我現在想把三等韻中的三類來分析一下。現在一共有三個標準幫助我們來判斷：

I. 韻圖喉牙唇音三四等的排列：(A)四等，(B)三等，(C)三等。

II. 聲母的分配情形：(A)p, k, ts(包括 t̃, t̃s, ts)；(B)p, k；(C)p, k

III. 唇音字在安南音中的現象：(A)t；(B)p；(C)f。

根據這三個標準，我們把三等韻分成下列幾類：

甲、支_A，脂_A，真_A，侵_A，祭_A，仙_A，宵_A，清_A，鹽_A——四等；p, k, ts；安南 t。合於：I A, II A, III A的標準。定爲A類。

乙、支_B，脂_B，真_B，侵_B，祭_B，仙_B，宵_B，鹽_B，庚_三——三等；p, k；安南 p。合於 I B, II B, III B的標準，定爲B類。

丙、微，欣，文，廢，元，嚴，凡——三等；p, k；安南 f。合於 I C, II C, III C的標準，定爲C類。

丁、東_三，鍾，虞，陽，尤——三等；p, k, ts；安南 f。合於 I C, II A, III C的標準。

戊、幽——四等；p, k；安南 p。合於 I A, II B, III B的標準。

……以下省略……」（206-207頁）

(A)(B)(C)および甲乙丙……は単なる順番に過ぎず、A類・B類・が重紐韻を指す。

16. 王靜如(1948) 論古漢語之腭介音 3等(乙組 i)と4等(甲組 i)

(『燕京學報』第35期、1948年、58-94頁)。

①「總之，從安南漢字唇音甲、乙兩組之異讀，日本萬葉集漢字牙音甲、乙之分劃，高麗漢字牙音甲、乙發音之歧異，以及國內方音仍存有甲、乙分別之痕跡，很可證明第一類韻中有兩種腭介音。在甲組之腭介音強而清如 i，在乙組之腭介音弱而暗如 i₀。」（71頁）

②「第一類韻系中，唇牙喉音重紐在甲組的，宋人韻圖排在四等的，有腭介音較強而明顯的 i，在乙組或排在三等的，他的腭介音是較弱而暗的 i₀(舊用 i)。」（77頁）

③「四 強弱腭介音在安南高麗日本譯音及方音的證據」（62頁）、「五 強弱腭介音在反切下字的證據」（71頁）、「六 強弱腭介音可解除上古舌音諧聲及齒音諧聲之困難」（74頁）【以上は節の題名】

09. 王靜如(1941)「論開合口」では万葉仮名の乙系(3等)と甲系(4等)の甲乙は参考程度の如くであるが、

16. 王靜如(1948)では甲組・乙組は主要な用語として使用されているように見える。③の「強弱腭介音」は

4等の強介音と3等の弱介音のことである。強を先に配し、弱を後に配したため、4等(甲組)と3等(乙組)となったとも考えられる。

17. 藤堂明保(1949) 支那音韻學と萬葉ガナの母音系

特段の表記はない

(『斯文』第二號、1949年、3-5頁)

(万葉仮名の甲類と乙類に言及)

①「切韻のみを手懸りとして甲乙兩類を區別することはできない。そこで一步溯つて上古韻に據つてみると、同じ中古の支韻でも上古の「支」部系のは悉く甲類に入り(支岐卑辟等)、之に反して上古の「歌」部系の字はすべて乙類に現われる(奇寄彼被)。してみると萬葉ガナの母音系は、中古音(切韻)のみによつては理解せられず、それよりもやゝ上古韻に近い三國六朝音系によらねばならぬことが判明する。」(3頁)

18. 藤堂明保(1949) 萬葉ガナの甲乙類と中古漢語の3・4等の本質 3等 \dot{i} と 4等 \dot{i}

(『中国語學』27、1949年、1-2頁)

①「喉牙唇音は常に舌歯音*【「舌歯音というときには半舌・半歯・4等の喻母を含み、歯音2等を除く」との注記がある：対談者】より口蓋化が遅れるかという、必ずしもそうでなく、喉牙唇音のうち、3・4等兩属韻【所謂重紐韻：対談者】の4等に属するものは、舌面音と同じように口蓋化している。これは上古(詩經時代)に於いて、介音に口蓋的なものと非口蓋的なものがあつた為と考えられる。即ち上古に於いて喉牙唇音及び舌歯音に口蓋的な \dot{i} が伴ったとき、中古(切韻時代)では3・4等兩属韻の喉牙唇音4等と舌歯音になり；上古に於いて喉牙唇音に非口蓋的な \dot{i} が伴ったとき、中古では3・4等兩属韻の喉牙唇音3等と3等專屬韻【所謂純3等韻：対談者】とになり；且つ上古に於いて、舌歯音は非口蓋的な \dot{i} を伴うことはなかつた、と考えられる。」(1頁)

②「上古韻部から中古韻への変化表」(2頁)のA Bが書き添えられた部分だけを抜き出すと次の通り。

上古部 条件	沒 痕 脂 戾 德 登 之 曷 祭 元 鐸 魚 _者 魚 _韻 歌 屑 至 真 錫 支 耕
喉牙唇 \dot{i}	質 _B 真 _B 脂 _B 職 _B 蒸 _B 脂 _{合B} 薛 _B 祭 _B 仙 _B 昔 _B 魚 _B 支 _B 陌 _{三B} 庚 _{三B}
喉牙唇 \dot{i}	真 _A 脂 _A 質 _A 祭 _A 真 _A 昔 _A 支 _A 清 _A 薛 _A 淳 _A 仙 _A
舌歯 \dot{i}	質 _A 真 _A 脂 _A 職 _A 蒸 _A 薛 _A 祭 _A 仙 _A 昔 _A 魚 _A 支 _A 質 _A 脂 _A 真 _A 陌 _A 支 _A 清 _A 櫛 _A 昔 _A 術 _A

③【表の注記として】「Aは喉牙唇4等と舌歯音(この表にては歯音2等を含む)。Bは喉牙唇3等。」(2頁)とある。

上古部の喉牙唇に対応する中古韻を見ると、大半が3・4等兩屬韻(所謂重紐韻)であるため、一見すると、AとBは重紐の対立を表記したもののように見えるが、それ以外に、職_B・蒸_B・魚_Bのように所謂3・4等單韻(藤堂氏の用語、喉牙唇音は3等のみで4等は無い。もっとも上田正(1975)は蒸(平声)・拯(上声)・證(去声)・職(入声)を重紐韻とする⁴)を含むので、AとBは重紐の対立を表記したものではないと見てよい。

19. 三根谷徹(1949) 輕唇音化の問題

乙(開3等)甲(開4等)

(『中国語學』27、1949年、2-3頁)

丁(合3等)丙(合4等)

- ①「輕唇音化の起こったのは有坂・河野両氏の乙類の介音(中舌的な -i)をとる場合いであることは明きらかである」(2頁)
- ②「清韻は甲丙類のみで乙丁がなく、庚韻は直音と乙丁類で甲丙がないので、両韻は介音のみ異なる韻と考えられる。」(3頁)

これは05.河野六郎(1939)を受け継いだ表記。

20. 頼惟勤(1949) 重紐問題

(3等と4等)

(『中国語學』27、1949年、3-4頁)

文面に等位の記述は無い

- ①「広韻の中には、切字も韻字も同音であって、一見互に同音であるかと思われる反切が幾対か存在する。これを重紐と名づけるが、広韻の中にその存在を確認したのは陳澧である。」(3頁)

*21. 藤堂明保(1950) 中古漢語の音韻論的対立

3等(?B)と4等(?A)

(『日本中国學會報』第一、1950(昭和25年3月30日発行)年、55-96頁。表紙は昭和24年、目次は1949年とする。)

- ①「北齊の顔之推は切韻の編定にも與つた人であるが、「岐山の岐は奇と讀むべきだが、江南では祇と讀んでいる」(顔氏家訓音辭篇)と述べて、奇一祇を明白に區分して居り、第二に我國の萬葉ガナでは、奇(乙類のキ)と祇(甲類のキ)とを明白に使い分けて居り、第三に宋人の韻圖では、奇を三等に、祇を四等に記入している。かような重紐は奇一祇のみに止まらない。」(74頁)
- ②「以上四、五、六、七項に亘つて、先ず特に複雑なA類韻(三四等合韻)【カールグレンの α 類韻の一部に相当、喉牙唇音に3,4等の対立が有る:対談者】の性格を各方面から研究してみたが、續いてB類韻(純三等韻)【カールグレンの β 類韻に相当:対談者】の性質を研究する。」(81-82頁)
- ③「C類韻【カールグレンの α 類韻の一部に相当、喉牙唇音に3等字しかなく、3,4等の対立が無い:対談者】とは切韻(廣韻)の東(屋)、鍾(燭)、陽(藥)、蒸(職)、魚、虞、之、尤の8韻を指す。」(83頁)

⁴ 上田正(1975)『切韻諸本反切総覧』京都大学・文学部中文研究室内 均社。上田氏は、広韻以外の諸本が憶(影母)小韻と抑(影母)小韻を対立させるので憶A、抑Bとする。蒸(平声)・拯(上声)・證(去声)を重紐韻とするのは職(入声)との四声相配に依るのであろう。

④「喉牙唇音三等字と齒上音とは、何れも反切下字が同系であつて、三等欄に配列すべきであり、喉牙唇音四等字と正齒、齒頭、舌上、半齒半舌、及喻母は、反切下字が別の一類を成して四等欄に配すべきである。而も此の反切下字から見て直ちに言えることは、A四等反切下字は「支氏移」等の palatal の字を用いている。Bこれに反し三等反切下字は「宣【宣の誤：対談者】奇羈爲」等の喉牙唇音のみより成り、一つも舌齒音の palatal 字音を混えていない—という重大な事実である。」（75 頁）

まず①により重紐の別を韻図の等位である 3,4 等で表記している事は見て取れる。②③にあるA類韻、B類韻、C類韻は重紐の別とは直接の関係は無い。④の「Bこれに反し三等反切下字は「宣【宣の誤：対談者】奇羈爲」等の喉牙唇音のみより成り」は、あるいは「これに反しB三等反切下字は「宣【宣の誤：対談者】奇羈爲」等の喉牙唇音のみより成り」の誤植か？「宜奇羈爲」は支韻重紐3等の字であるから、「B三等反切下字」のBは②のB類韻のことではない事明らかである。④のAとBは重紐の別に対応したA（四等）とB（三等）の可能性がある。このようなA（四等）とB（三等）の用法は、ここ一箇所のみであるから不安ではある。A類韻（三四等合韻）とB類韻（純三等韻）という用法の中に、紛れ込んだもので、体系的な用法ではない。もしも、A（四等）・B（三等）が認められるとしたら、日本に於ける、重紐三等をB、重紐四等をAと呼んだ最初の例と見ることができる。

22. 周法高(1952) 三等韻重唇音反切上字研究 3等(B)と4等(A)

(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第23本下、203-233頁、1952年。)

①「爲稱說方便計，我們管三四等合韻中四等的重唇音叫A類（元音 e、ɛ），三等的重唇音叫B類（元音 ɛ、ɛ̃），純三等的輕唇音叫C類（元音 ɐ、ə、o、u）。A、B兩類唇音不互相用來作反切上字，可是因爲A、B兩類都有時用C類作切語上字，所以A、B、C三類便系聯在一起了。」（385頁）

23. 三根谷徹(1953) 韻鏡の三・四等について 甲(4等)と乙(3等)

(等位は参考程度で甲乙が主)

(『言語研究』第22・23号、1953年。『中古漢語と越南漢字音』汲古書院所収、1993年、45-62頁による。)

①「多くの学者は切韻の重紐を頭子音の差とせず介音の中舌・前舌或は主母音の広狭の差とするが(2.3.1-3参照)，その見地よりすれば第Ⅲ群は三・四等に分れ、

三等(乙)	B ₁	C	D
四等(甲)	A	B ₂ (?)	C D

【上記のA B₁ B₂ C Dは陸志韋(1939)「證廣韻五十一聲類」の51声母の一部で、A(正齒、齒頭音など) B₁(齒上音) B₂(舌上音など) C(唇音など) D(牙喉音)：対談者注】

とならなければならない。然るに韻鏡はC Dについては(若干の例外はあるが原則として)その乙類を三等に甲類を四等におきながら、B₁はこれを二等に排し、A組の之昌式時而以の各類及びB₂組を三等に、A組の子七疾息除の各類は四等に排しているのであつて、この事実に基いて「韻図の拗音等呼は組変えね

ばならぬ」との提言【21. 藤堂明保(1950)：対談者】がなされ、「韻鏡が実際の音を忠実に写したものでなく、切韻の一の解釈であると見るべきであらう」という説が出されるのである。」(55-56頁)

②「本稿の叙述にあたって切韻の音韻体系についてはできる限り等韻学の用語の使用を避けたが、韻鏡の性質が上述の如くであるとすれば、中古音の研究に際して、字母・等呼などによる分類を用いることの非なることは明かであり、それらの用語は、韻鏡その他の等韻図についてのみ有用なのである。」(59頁)

重紐韻についての①における「三等(乙)」および「四等(甲)」という記述は三根谷氏の考えによるものではなく、一般的な記述を紹介したに過ぎない。三根谷氏の考える重紐の異なりは、介音や主母音、もしくはその両者によるものではなく、頭子音すなわち声母によるものである。したがって、重紐の異なりに3等4等などの等呼を利用すると、韻母の異なりであることを認めることになり、三根谷氏の立場からすると不可である。そこで三根谷氏は上代日本語の母音の別に名付けられた甲乙を利用して重紐を表記する。なお、②のような、切韻の音韻体系の記述に韻鏡その他の等韻図の用語はなるべく利用しないという研究姿勢により、3等や4等などの等韻図の呼称を利用しないということでもある。

24. 辻本春彦(1954) いわゆる三等重紐の問題 3等(B類)と4等(A類)

(『中国語學研究會會報』24、6-9頁、1954年)

①「いわゆる三等重紐の問題でとりあげられる韻部は支脂祭真諄仙宵侵塩と庚清である。これらの韻部の唇牙喉音に属する字が韻図においてたまたま三等四等にまたがる(三等をB類、四等をA類として区別する)所から問題が出て来たわけであるが、実をいえばその他の三等韻についても検討を加える必要がある。」(6頁)。

②「従来この問題を解決するのに専ら反切下字の調査に終始し、反切上字に検討を加えなかったことは大きな手落ちといわねばならぬ。すなわち、反切上字がA類に属するものはすべてA類、反切上字がB類に属するものはすべてB類という事実に注意する必要がある。」(7頁)

重紐について体系的にA類B類を使用した、日本に於ける、確実な文献である。21. 藤堂明保(1950)の3等(?B)・4等(?A)の4年後となる。

*** 25. 藤堂明保(1957) 『中国語音韻論』 3等と4等**

(『中国語音韻論』江南書院、1957年)

①「かような拗音韻のうちで、同じ/k/, 同じ/p/, 同じ/・/などの共通聲母について、二回反切があらわれ、一見するとまるで重複したように思われるものを「重紐」と呼ぶ。」(183頁)

.....

*** 26. 平山久雄(1967) 「中古漢語の音韻」 3等(B類又は乙類)と4等(A類又は甲類)**

(『中国文化叢書1 言語』大修館書店、初版1967年。五版1981年、112-166頁による。)

①「重紐による韻母の対立は、支・脂・祭・真・仙・宵・侵・鹽の諸韻の、唇・牙喉音声母の下で存在する。これらの中、韻図の4等に配される韻母（または小韻）を〈A類〉（または〈甲類〉）、韻図の3等に配される韻母（または小韻）を〈B類〉（または〈乙類〉）と呼ぶ。」（149頁）

中村：言うまでも無いことですが、「韻、声母、開合口、3等/4等」を指定して初めて重紐を特定することができます。3等/4等という等位を用いた呼称は便利ですが、重紐韻以外にも使用する汎用性の高いものです。この3等/4等を、乙類/甲類もしくはB類/A類とすると、重紐であることが明瞭となります。問題は、乙類(3等)/甲類(4等)もしくはB類(3等)/A類(4等)がどのような経緯で用いられるようになったかです。

吉池：表1を利用して、その点を確認しましょう

3. 甲乙

吉池：04. 陸志韋(1939)の第一類(開3等)・第二類(開4等)・第三類(合3等)・第四類(合4等)の、第一類、第二類、第三類、第四類は、重紐にのみ用いる呼称ではなく、汎用性の高いものです。なお、等呼の順番(開3→開4→合3→合4)と符合しており、不自然なところはありません。

中村：それに対して、同年の05. 河野六郎(1939)の乙(開3等)・甲(開4等)・丁(合3等)・丙(合4等)は、陸志韋(1939)とは似て非なるものですね。

吉池：甲乙丙丁という順番と等呼の順番3等,4等が合っておらず、その点について言えば、不自然といえば不自然です。

中村：これは言うまでもなく、橋本進吉(1931)の用語を利用したものです。橋本氏は奈良時代の文献において、現代日本語で区別のない音節が2類に分かれることを確認し(いわゆる上代特殊仮名遣い)、その2類を甲類、乙類と呼びました。甲類の万葉仮名に重紐4等字が、乙類の万葉仮名に重紐3等字が使われる場合が目につくので、河野氏はそれを中古音の重紐の表記に利用し、甲類(4等)・乙類(3等)とし、それを合口韻にも敷衍したものです。

吉池：甲類(3等)・乙類(4等)とはせず、甲類(4等)・乙類(3等)としたのは、上代日本語の甲乙を利用したためということですね。甲類・乙類は重紐に特有の呼称(少なくとも日本の漢語音韻史研究においては)なので、重紐研究にとって有用なものと言えます。

中村：次にこの甲乙を重紐現象の表記に利用したのは中国人研究者の 09. 王静如(1941)です。重紐現象は主に等位の 3 等と 4 等で表記するのですが、上代日本語の甲類・乙類を、甲系・乙系と呼びかえて重紐現象の解説に利用します。もっともこの甲系・乙系という呼称は参考程度とみることができそうです。なお、カールグレンの三四等韻の三種の分類 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ はそれぞれ甲類・乙類・丙類とし、上代日本語の甲系・乙系と呼称を区別します。

吉池：王静如はその後、16. 王静如(1948)で 3 等(乙組)・4 等(甲組)とします。かつて乙系・甲系としていたものを、乙組・甲組と呼びかえただけでなく、乙組・甲組を、重紐を表記する主要な用語として採用しています。

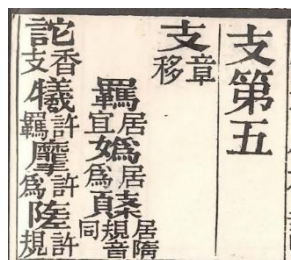
中村：19. 三根谷徹(1949)の乙(開 3 等)・甲(開 4 等)・丁(合 3 等)・丙(合 4 等)は、05. 河野六郎(1939)を引き継いだものです。しかし、23. 三根谷徹(1953)になるとだいぶ趣きが異なりますね。

吉池：等呼は参考程度で甲・乙が主となります。三根谷氏の考える重紐の異なりは、介音や主母音、もしくはその両者によるものではなく、頭子音すなわち声母によるものであるため、重紐の異なりに 3 等 4 等などの等呼を利用すると、韻母の異なりであることを認めることになり不可なのでしょう。そこで三根谷氏は上代日本語の母音の別として名付けられた甲乙を利用して重紐を表記したということでしょう。

4-1. AB

中村：表 1 によると、重紐に A 類 B 類を用いたのは中国人研究者の 13. 周法高(1945)のようですね。3 等(B 類)と 4 等(A 類)とします。3 等 4 等という順番にしたがって、3 等(A 類)と 4 等(B 類)とはせず、敢えて順番を逆にし、3 等(B 類)と 4 等(A 類)としたのはなぜかということが問題になります。09. 王静如(1941)が万葉仮名の甲乙類を利用して、乙系(3 等)・甲系(4 等)としました。3 等 4 等という順番にしたがわないのは、両者同じです。これに依るならば、13. 周法高(1945)の 3 等(B 類)・4 等(A 類)は、09. 王静如(1941)の乙系(3 等)・甲系(4 等)の影響、即ち日本の万葉仮名の影響のように見えます。

吉池：そのような可能性について皆無だとは言いませんが、13. 周法高(1945)が 3 等(B 類)・4 等(A 類)としたのは、陳澧『切韻考』の影響と見たほうが穏当ではないでしょうか。参考までに『切韻考』「本編の表」と「外篇の表」の一部を挙げ比べてみます。



『切韻考』 「本編の表」



『切韻考』 「外編の表」

中村：訖、犧、羈、陸について見ると、「本篇の表」は、第一段目(開 4 等)、第二段目(開 3 等)、第三段目(合 3 等)、第四段目(合 4 等)とし、「外編の表」は、第一段目(開 3 等)、第二段目(開 4 等)、第三段目(合 3 等)、第四段目(合 4 等)としていますね。第一段目と第二段目の等呼が本篇と外編では異なる。

吉池：たしかに第一段目と第二段目は、『切韻考』「本編の表」と「外編の表」とで韻字の配列が異なります。先に見た 04. 陸志韋(1939)は、『切韻考』「外編の表」の配置によって、第一類【第一段目】(開 3 等)、第二類【第二段目】(開 4 等)、第三類【第三段目】(合 3 等)、第四類【第四段目】(合 4 等)としました。ところが、13. 周法高(1945)は、「本篇の表」の配置である第一段目(開 4 等)、第二段目(開 3 等)、第三段目(合 3 等)、第四段目(合 4 等)によって、4 等(A類)、3 等(B類)としたと見て大過はないでしょう。

中村：ところで、周法高(1945)は A B というラテン文字を利用して重紐の別を書き分けたわけですが、甲類でカールグレンの α 韻、乙類で β 韻を表記する仕方が既に行われていたので、それと区別するために A B を利用したということでしょうね。

吉池：或はそれとともに、10. Nagel, Paul (1942) の 3 等 (x) と 4 等 (y) のラテン文字 x, y の影響もあったかもしれないと想像しています。もともと、周法高(1945)に「民國三十年初稿於昆明」とあるように、1941 年の初稿が、重訂の周法高(1945)と大きく異なるところがなかったとすると、この想像は成り立ちませんが。

中村：周法高の初稿(1941)は、前回に議論した「重紐」という用語の初出とも関わることなので、1941 年の初校を見たいものです。

4-2. 日本に於ける A B の採用

中村：日本に於ける A B の採用ですが、吉池さんは、21. 藤堂明保(1950)が早いと考えているようですね。

吉池：表1で「3等(?B)と4等(?A)」として?を付しましたが、そのように考えて矛盾はないと思っています。

中村：問題の「而も此の反切下字から見て直ちに言えることは、A四等反切下字は「支氏移」等の palatal の字を用いている。Bこれに反し三等反切下字は「宣【宜の誤：対談者】奇羈爲」等の喉牙唇音のみより成り、一つも舌歯音の palatal 字音を混えていない—という重大な事実である。」という一文について、吉池さんは、「Bこれに反し三等反切下字は」を「これに反しB三等反切下字は」に訂正し、A・Bを、重紐を指すものとしませんが、どうなのでしょう。思うに、これは順番を示す語であり、訂正までして、重紐の用語として理解する必要はないでしょう。

吉池：なるほど。重紐に見えるA・Bの記述は、21. 藤堂明保(1950)の中でこの一箇所のみです。また、25. 藤堂明保(1957)『中国語音韻論』でもA・Bは使用されないのので、たしかに単なる順番を示す語とみたほうが良いかもしれません。そうすると、日本におけるA・Bの使用の初出は、24. 辻本春彦(1954)となりますね。

5. 最後に

中村：重紐の対立を甲類・乙類と呼んだ最初は、日本の研究者による05. 河野六郎(1939)です。3等(甲類)と4等(乙類)ではなく、3等(乙類)と4等(甲類)としたのは、上代日本語の研究である橋本進吉(1931)の万葉仮名研究において、万葉仮名の甲類に重紐4等字が対応し、乙類に重紐3等字が対応する場合が目立つことに依ったものです。

吉池：他方重紐の対立をA類・B類と呼んだ最初は、中国の研究者による13. 周法高(1945)です。3等(A類)と4等(B類)ではなく、3等(B類)と4等(A類)としたのは、陳澧の『切韻考』「本編の表」の韻字配列の影響です。

中村：4等を先にし、3等を後にして、甲類・乙類、A類・B類を配したのは、先行文献の影響によると見る事ができるわけですね。

吉池：先行文献の影響が主たる要因なのでしょうが、それを受け入れる素地が、推定音価自体の中にあっただとも言えます。

中村：どういう事でしょう。

吉池：有坂氏、河野氏、王静如氏は、重紐の対立を介音の違いに求めます。01. 有坂秀世(1935)や02. 有坂秀世(1936)は重紐3等の介音を中舌性拗音とし重紐4等の介音を前舌性拗音とし

ます。そうすると、4等の前舌性拗音について先に書き、3等の中舌性拗音を後に書くのは、文章表現の上で自然な事でしょう。王静如氏は、重紐4等の介音を「前」もしくは「強」とし、重紐3等の介音を「後」もしくは「弱」とします。そうするとやはり、「前後」・「強弱」という表現に依り、4等を先にし、3等を後にするというのも自然な心情でしょう。

中村：他方、13. 周法高(1945)は、文献の各所で「B類要比A類的元音開些」（B類の母音はA類よりもやや開いている）とし、重紐A類とB類の違いを主母音の広狭に求め、3等（B類）に広めの母音、4等（A類）に狭めの母音を想定します。これから、どちらが先か後かは認めにくいです。

吉池：たしかに母音の開（3等）・閉（4等）とした場合どちらが先か後かは認めにくいですが、少なくとも、有坂氏、河野氏、王静如氏などのように介音の「前後」「強弱」などの違いとする場合は、4等（甲類、A類）・3等（乙類、B類）を受け入れる下地が、各自の推定音価の性質（あるいはその呼称）それ自体の中にあるとみて良いかもしれません。

中村：それでは今回はここまでとしましょう。